

目 次

はじめに M. ウィリアム・スティール（篠原将成訳）	1
解題	3
はじめに 松田 忍	3
一 書簡 松田 忍	13
二 日記・手帳 松田 忍	17
三 戦前・戦時期の史料	20
1 東京帝国大学卒業以前 町田祐一	20
2 内務省入省から東京府経済部長まで 町田祐一	24
3 栃木県知事・岡山県知事 西山直志	28
四 戦後期の史料	32
1 公職追放関係 黒川智子	32
2 フレンド関係 郷戸夏子	34
3 世界連邦関係 土屋宗一	36
4 新生活運動関係 満園 勇	37
5 公明選挙運動 町田祐一	40
6 戦後におけるその他の活動 山崎翔平	42
五 著作・詩作 篠原将成	47
六 家族関係・家計簿 中野 佳	52
おわりに 松田 忍	54
凡例	56

目録	57
書簡の部	57
書類の部	137
執筆者紹介	345

はじめに

安積得也関係文書の整理及び目録作成を6年がかりで完遂できたことに安堵している。松田忍(昭和女子大学・専任講師)・篠原将成(国際基督教大学・大学院生)を幹事として設立された本整理会に参加してくれた学習院大学、国際基督教大学(ICU)、昭和女子大学、東京大学の学生に感謝したい。

本学の社会科学科で長年教鞭を執られた安積仰也元教授は、父親である安積得也が所蔵していた文書をICUに寄贈した。当初、本学図書館は文書整理の知識・人材の不足を理由に、その受け入れに消極的だった。そこで、私と本学の大学院比較文化研究科の学生数名が安易にも整理と目録作成の仕事を引き受けることとなった。資料整理の専門的助言を仰ぎ、私たちは1万3,000点にのぼる文書群の目録化に着手することにした。初回の整理会は2008年11月19日に開催された。以降、40回近く開かれることになった整理会には学習院大学、ICU、昭和女子大学、東京大学から学生が集まり、各回、5人から10人が集まり、8時間ほど作業を行った。

この作業を開始するに際し、安積仰也元教授のご厚意により賜った寄付は、史料整理に必要な中性紙の封筒や文書箱の購入に充てられた。学生たちは有志により参加し、無償で作業を行った。実践もまた一つの学びとするなら、参加した学生たちはいまや現場を知る専門家であるといえよう。

安積得也は1900年に生まれた。1924年に東京帝国大学法学部を卒業すると、内務省に入省し主に社会福祉政策に携わった。1933年とその翌年には日本代表として国際労働会議に出席、1942年には東京府の経済部長に任じられ、失業保険政策の立案に携わる。1943年7月1日から1944年11月1日までの間、33代栃木県知事として奉職した。その後、岡山県知事を歴任している。戦後は、公職からは退き、著作に専念し論壇の人となった。そうした活動の傍ら、詩作を行い、自治大学では教壇にも立った。キリスト教入信後、日本では小規模なクエーカー派(フレンド)のグループの一員となった。戦後の平和運動や反核運動にも積極的に参加し、再軍備を目指した日本国憲法改憲に反対するICUの教授陣のグループにも加わった。さらに、戦争で疲弊した国民の生活改善を目的とした新生活運動にも関わっていく。1952年にはフレンド世界会議に日本代表として出席した。1960年には、世界連邦連盟の武蔵野支部の議長となり、その翌年には第10回世界連邦連盟世界大会とフレンドの国際セミナーに参加している。その後、新生活運動の理事にも就任している。安積のほとんどの著作は、戦争という惨劇を経験した若者に希望を与えるために編まれたものだ。主だった著作をあげると『未来への出発』『新商人訓』『少年と人生』『選挙と生活50話』『日本の課題』『自分の知らない自分』『我ら地球市民』などがある。詩集では『一人のために』が現在も刊行中で、50版以上を重ねている。

すでに触れたように安積得也関係文書は1万3,000点以上からなり、大学時代から亡くな

る 1990 年代までの日記、安積が作成した昭和初期の社会福祉政策に関する文書、イギリス留学時に出席したハロルド・ラスキによる講義のノートなどを収録している。それだけでなく、戦中期の地方自治体関係の文書も含まれ、非常に興味深い史料である。戦後のものでは、平和運動に関わるもの、キリスト教（フレンド）入信や新生活運動に関するものをあげることができる。特に興味を惹かれるのが、日本でのクエーカーの活動とイギリス・オックスフォードで 1952 年に開催された第 3 回フレンド世界会議に関する史料である。他には、新たな日本を担う若者たちに向けた詩作や随筆を数多く収蔵している。整理が終わり ICU 図書館に収蔵される安積得也関係文書は、これから国内外の研究者の興味を喚起することになるだろう。

最後にもう一度、今回の安積得也関係文書整理会に参加してくれた若手研究者や学生に感謝を述べたい。そして、この経験が歴史と過去のものに対する愛情と情熱を確かなものとするための一助となったことを願う。

国際基督教大学教授（日本近代史）

M. ウィリアム・ステイール

（篠原将成訳）